ほぼ週刊コラム　Partnership論　その２１９

**シリーズ：『米国Partnership税制勉強会』**

**第三十一回勉強会（通年内容は**[**年表rev.9**](http://llc.a.la9.jp/Papers/evolution%20history/evolution%20history%20of%20US%20partnership%20taxation%20rev9.ppt)**参照方）の準備**

**Godが配置したthe truthをdiscernする**

20170113 rev.1 齋藤旬

　明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い致します。

 [**Inventing the People**](https://www.amazon.com/Inventing-People-Popular-Sovereignty-England/dp/0393306232/ref%3Dsr_1_1?ie=UTF8&qid=1477553338&sr=8-1&keywords=Inventing+the+People)**の半訳作業ファイルwork9を**[**和英混訳**](http://llc.a.la9.jp/WaEi%20KonYaku.htm)**のコーナーにアップした。**

1．The Divine Right of Kings　神授王権 19-22

今週はこれらを和訳した。

　**なるほどdiscernという英単語はこういう具合に使うのか！**と合点がいったので、今週のpunch lineは和英混訳文で20page、原文で位置No.6567中337にある：

…to climb up to the king’s heart and speak the truths placed there by God, even when the king had not discerned them himself.

…王の胸襟に登り、Godがそこに配置したthe truthsについて、例え王自身はそれをdiscern（心で識別）出来ていなくとも、言明する…

を取り上げることとした。

　**実は2013年にローマ教皇がフランシスコになってから、彼が次々と出す論文の中にこのdiscernが多用されている**。例えば昨年6月に[*Amoris Laetitia*](https://w2.vatican.va/content/dam/francesco/pdf/apost_exhortations/documents/papa-francesco_esortazione-ap_20160319_amoris-laetitia_en.pdf)（仮題、愛の喜び）が発行され、「離婚者・再婚者にも教会は門戸を開きましょう」という提案が為されている。今までのカトリック教会は「神が結んだ男女を人間が引き離してはならない」と考えて、離婚者・再婚者に厳しかった背景がここにはある。そうした状況の中、果敢にもフランシスコ教皇は「そうはいっても離婚者・再婚者にも個別に事情があるだろう。周りの者はその離婚や再婚に至った経緯をdiscernして、教会のcommunion（霊的な交わり、聖体拝領）に迎え入れて良い者は迎え入れてくれ」と提案した。

　ところが日本語にはdiscernに上手く適合する言葉がない。一応、日本のカトリック中央協議会は「識別」という言葉を当てはめているが、理性的で冷たすぎて今ひとつピンと来ない。先ほどのdiscernを識別に置き換えてみると「周りの者はその離婚や再婚に至った経緯を識別して、教会のcommunionに迎え入れて良い者は迎え入れてくれ」となるが、「識別しろ」と言われても再考の余地は広がらない。離婚者・再婚者に門戸は開かれない。

　**そういうことを教皇は言いたいのではないと合点がいった**。つまり「頭」ではなく「心」で、その離婚や再婚に至った経緯を識別してくれと教皇は言っている。Godがそこに配置した真実を見出してくれと言っているのだ。再考の余地が広がる。

カトリック中央協議会はdiscernを「識別」と和訳している間はニッチもサッチも行かないと思うが、とにかく、私が作成する和英混訳文ではdiscernはdiscernのままとすることにした。

　今週は以上。来週も請うご期待。